

■ 震災を知らない娘へ 論説副委員長・長沼隆之 2022/10/27

6歳の娘が来春、小学生になる。阪神・淡路大震災を知らない娘に、何をどう伝えるべきかを思案している。

直接経験していないことは、一世代をまたぐだけでも伝えるのは難しい。娘が通う幼稚園でも避難訓練をしているが、「動く」だけでなく、災害を「学ぶ」ことが大切だ。ヒントを得たいと、先日神戸で開かれた「防災推進国民大会」（ぼうさいこくたい）に足を運んだ。

防災教育を巡る意見交換で、元中学教諭で東日本大震災の語り部を続ける、佐藤敏郎さん（59）の話聞いた。

まな娘のみずほさん＝当時（12）＝が宮城県石巻市立大川小学校の6年生で、津波で犠牲になった児童74人の一人だった。佐藤さんは遺構を訪れる人々を案内し、いまだ解明に至らぬ惨事への思いを語っている。

「震災に真っすぐ向き合う教え子たちを見ながら、私自身がどう向き合えばいいのかと悩んでいた」。答えは津波に耐えた同小の野外ステージにあった。書かれていた言葉は「未来を拓（ひら）く」。校歌のタイトルだ。

「何のために伝えるのか。聞いた人が助かるために伝えている」。つらい、かわいそう、悲劇の場所…。ありきたりの言葉ではなく、子どもたちの死の意味づけができないか。

だから「あの日」だけでなく、震災前、当たり前にあった日常も語る。救える命を守る未来をつくっていくために。

「どうやって伝えるのか。訪れた人たちとの対話の中で、言葉を紡ぎ出していきたい」

私たち体験者ができるのは語ること。でも、震災を知らない世代に、私たちの語りを継いでもらわないと未来の命は救えない。だからこそ、娘にもありのままを伝えようと思う。

神戸新聞「日々小論」